

女神の背骨

桑原 徹

女神の背骨

背骨は頭蓋骨の中に入ることその運動を観念の中に没入させている。この没入が存在の形態の中で最も美しいものが蛇と魚である。彼らの背骨のうねりながら直進する様は、そのまま観念の中で運動に受けつがれる。彼らの頭蓋は、人間のそれのように細く長い支柱の花台の上に乗せられた容器ではなく、まさに目を見はった矢印の先端なのである。それはうねりながら観念の中を進む。いま、背景の中空に見ている一本の背骨は、矢印としての方向性も支柱としての役目も失っている。それは頭蓋を失っているからである。背骨の先端に頭蓋が運動を押しやる方向に着くか、運動の向きに着くかで、背骨と頭蓋のつくりあげる均整も全く違ってくる。女神か蛇かの分れ目はここにあると言ってもよい。

背骨のある背景は、あくまでもイメージを通じて見られた風景である。つまり背景に背骨があることで見られる主体が存在するだけではなく、見る主体も幾分背景に染みこんでしまっているのである。女神という本来は実体のないものに、女の身体を接近させてゆくやり方は、見る主体の意志が押し花の染みのように染み出た結果である。女神が女の身体を持つとき、見る側は私たちが見られる側も私たちである。この意味では背骨はある種の恥じらいの象徴でもある。おそらく、神が女の姿を取ったのは、背景の中に見られる感覚が始まりだったのであろう。

魚から女神にいたるまでの背骨をずらりと並べたからと言って、それで表現の進化の過程が見えてくると言うわけではない。しかし背中を見られるのが常態とも言える魚と、背面をイメージ

の入口とする女神とが並べられることによって、かつての魚と女神の関係がなんであったかがもう少しはっきりするはずである。背面に注目したとき、魚が女神の足元でうごめくひとつのアイロニーであったことは明らかである。そして、このときの魚の定義は、あくまでも背中から見られるのが常態である魚としての存在である。こうして女神の足元を泳ぐ魚は、実体が思想によって少し二重にほかされたものである。一方は実在の海に、もう一方は思想の海に生息すべきものである。それが尾を一にする双頭の魚のように、少しぶれて存在しているのである。この中間段階のものが最も女神の近くを泳ぐ。それは表現にも生物学上の分類が持ちこめれば、このあたりで神の種と魚の種が分離しているかのようにである。

身体と神とが美しく融合した見えない背面では、受胎告知以前のマリアのように、人間の女の身体が背後から神性のベクトルによって貫かれ、ヒドラと化した神性の矢は人間の振りかざす知の剣によって次々に断頭されるといった様な、あたかも宿命と知をシンボライズした神話が美しいものをちりばめながら交ぜになつているのである。傷ついた女神の背中でのたうちまわつた、ついに背骨に絡みついてしまった神性の矢印。この背骨と神性のベクトルがいつびきの蛇となつてそのまま知恵のリンゴの樹に絡みつき、イヴに囁きかけるとしても、それほど不自然なことではない。蛇の形態がどこか生々しい神の印象を与えるのは、背骨だけで構成されている生き物だからである。神性の矢印がそこに絡みつき、知の女神が身体を直立に立させている心棒として頼っている背骨、そうして女神の身体から背骨が抜け出し、一個の独立した存在になるとき、それは限りなく蛇の形態に近づいてゆく。神は背骨に住みつくのである。

この時代には、蛇の形をなつた構造への憧憬である。人々は、やがて十九世紀以前に備い古き

欲望のブロック

完全なる海の骨。ヒトデはいまこんな形容をした方がふさわしい姿で机の上にある。かちかちに干上った様は、それが生物の残骸である以上骨としか言いようもなく、しかしそれにもかかわらず失っていない正五角形。海底をはって歩くこの生物は、たえず海底に接触している。ヒトデの背中につき出たコクソリの塔のような突起は、ヒトデによって感じられた海底である。形は5という数字のうちに濃縮され、この秩序からのずれはこの生物には全く許されていない。私たちがヒトデの形に気を引かれ、海星という美しい名前を与えるのも、この秩序の世界から海水といっしょに天上の星の対比物を汲み上げ、そこにかすかにゆらめく星の意味を読み取るからである。珊瑚や岩にはりつきながら自らをそれらに似せ、しかもそこに美しい幾何学への執着を透かしてみせるヒトデ。

彼に与えられた命題は以下のものであった。言葉がその建築物のひとつのブロックであること、その塔の片隅を崩してもいいから取ってきて証拠とすること、そして塔の壁の凹みに魚がひそんでいけば、それを取ってきて、この通り魚は言葉でできた欲望の固まりだと提示すること。彼はこの命題を持って寺院の塔が見える城壁の中に入ってしまった。城壁の内部は人々で混み合い、明らかに彼と同じ様に外部からやって来たと思しい人々の姿も何人か見つけられた。寺院は五つの入口から中央に向かってしだいに高くなってゆく五つの塔で構成され、合計二十五の塔の周囲には人々がバケツとハンマーを持って群がっていた。人々は塔の壁を崩しては凹みに住む魚を捜していた。ほとんどのバケツは水だけをはって中には何もいなかったが、ごくまれに青い魚が泳いでいるバケツもあった。地面に落ちている塔のかけらは、ハンマーでたたかれたにもかかわら

ずどれもこれも完全な正五角形であった。彼は塔に近づき群がっている人々がするようにハンマーを使った。

裏で感じ表に出す、これがヒトデの存在のほとんどである。この単純な存在は正五角形の形態を与えられたところで、幾何学の単純さに己れの生命の表現を委ねた。星が私たちの欲望の結晶化したものである限り、この幾何学の水に浸された生物は、海星という名前を失うことはないであろう。ここではすでに星の実体は、燐光と幾何学の中に消滅している。いま水槽の中を泳ぎ回る青い魚は、欲望の抑圧によってできた思想の魚である。それはある場合には、青い寶石にもなる。鮮やかな原色を持つことと小粒であること、この二つの条件からはじまり、抑圧された欲望が思想にまで固められたとき、それは水の中で自由に散らばり再び岩の陰から対称形に集まる。大地に埋もれた石が地表に現われるとき、それをシンメトリに並べ直すのは生命の役目である。石の様式は、ヒトデの生命による鏡影によって生まれた。

装飾と殻

机の上の海胆の殻は死んだ海の生物のにおいがし、二日後には棘の間に霧のような微が生えた。内部がかき出された海胆の殻を貝殻のような無機質の物として扱うことはできなかった。海胆の構造は建築の構造であると同時に生物の器官としての構造である。私たちはこの構造に天界十二宮を持つ宇宙の殻構造を見たり、幽霊船が行き来する霧深い海上をひとり石炭を焚きながら行く球体の蒸気機関を見たりする。これら前世紀の墓碑の下から掘り出した知によるイメージの宝物は、その時代には達し得なかった構造への憧憬である。人々はやがて十九世紀以前に使い古され

た知のイミテーションが海胆という言葉のまわりに磁石でもあるかのように吸い寄せられてゆく
のを見るであろう。ここでは全ての知が宝石のイミテーションのごとききらきらと輝いている。

内部から外部へあるいは外部から内部への海胆の透視はいずれも限られた知から見えぬ構造
への憧憬である。遺跡のドームの裏側に十二宮の住人たちが去ったあとと抜殻を見つけ、さらに
その外側で闘った天使や悪魔を本当に信じていた人々。彼らは、天界十二宮、宇宙、天使、悪魔
などの語法から来る建築工法の永遠の堅牢性を信じていた。しかし今ではこの永遠性を支える力
がこの天使や悪魔にはない。

かつて知は神を飾った。装飾は物に神の存在の手ごたえを発見したとき、その触れ得たところ
に捧げる私たちの側からの粗末な捧げ物であった。だからダイヤモンドであれエメラルドであれ
神の胸に輝くものは最もふさわしい知の材料のうちの一個であった。しかし海胆の場合のように
知のイミテーションが次々に吸い寄せられ、装飾行為が本来の存在まで危うくしかねないとき、
中心の存在は神のままではいられなくなり、ついには防禦の姿勢に入る。これは美に対して棘で
応えようとする者の最後の居城である。神はついにかつてサタンが居城とした場所にまで押しこ
められてしまったのである。

やがて透明で美しい模造の知は粉碎し狂った色ガラスとなって神めがけて突進してゆく。

私たちにとって不思議なのは海胆の存在を中心になぜ屑鉄のような知が集まるのかということ
である。海胆はいまだにかすかにきらめく知の墓場の墓碑だともいうのだろうか。亡霊の衣装
の上で知は美に変化してきらきらときらめいている。亡霊を見た者にとってそれがイミテートさ
れた知であると解ると同時に、それらは凍るように美に変化する。まるで露点に達した水蒸気の

ように思想のところどころにきらめいている知は、何の必然性もなく思想に付着しぶら下つてい
る。海胆の墓場、ここは前世紀以前のあらゆる装飾の材料を思うがままに手に入れることができ
る思想の墓場である。

海辺の観光地の土産物屋に所狭しとならべられている土産物の加工細工。亀甲、珊瑚、真珠、
貝殻、ここではたとえそれらが海の底から取ってきたそのままの姿をしていても、海全体の秩序
の毀れたひとつの破片の完全性ではない。海の構造の中の違った棚の中にあつたそれらは土産
物屋の店先でひとつの棚の上に並べられている。海の秩序はもはや省みられることなく、店先
を通る観光客の目を引くためにだけ、真珠を紐に通し、エナメル質の黒い模様を櫛の歯から歯へ
とうねらせ、珊瑚を珠に磨き、貝殻を薄く削いで半透明にする。あるいは海亀は剥製のまま壁に
かけられ、珊瑚はそのままガラスケースの中におさめられようとそれらは美しい女神の手の一部
が完全に残った古代の壺の破片にすぎない。しかし興味はいまこの海辺の土産物屋に集中する。
パラソルの開いたなぎさで水着を着た女たちが騒いでいても、人と海が接している場所はなぎさ
ではなくこの店先だとさえ思えてくる。女たちをその碧い舌の上に乗せてなぎさをひたひたとし
っている海は、思わぬ場所で胸の肋骨をひらき骨のならべ変えを許している。この店先には海の
まがいものが何に頓着することもなくならべられている。人は情によって襲をつけ、知によつて
珠を吊す。してはいけない行為などというものはここにはない。知と情によつて美しくさえなれ
ば、海の舌を凍らせエメラルドの角度に輝かせることさえ人はするであらう。